

つくばベンチャー大賞の創設と第1回の選考について

筑波大学大学院システム情報工学研究科 教授
特定非営利活動法人つむぎつくば 代表

高木英明

1. はじめに

任意団体「つくばベンチャー協会」と「NPO 法人つむぎつくば」は、つくばの地に起業家精神を醸成し、つくば発ベンチャー企業の輩出を応援するために、平成17年6月に『つくばベンチャー大賞』を創設し、7～9月に第1回募集を行って、10月には選考を終え、11月18日に授賞式を挙行了た。

本稿では、賞を創設した趣旨、募集と選考の経緯、選考結果、及び授賞式について、主催者の立場から報告する。

2. 大賞創設の趣旨

官民の研究機関が集積する「つくば」から、その研究成果が次々と製品化され、それがヒット商品となって、つくば発ベンチャー企業が IPO（株式公開）を果たし、しかも社会に貢献する。これは、先端科学で世界をリードする純粋研究とともに、成果が社会に還元される開発研究の拠点にもなるという、多くの人がつくば研究学園都市に描く理想的なシナリオである。今や、つくば発ベンチャー企業は100社を超え、つくばが科学技術とともに新産業創出の場としても大きく期待されるようになった。つくばエクスプレスの開業とともに、「つくば銘柄」がいよいよ世に出ていこうとしている。このような秋（とき）にあたり、これまでつくばのベンチャー企業を結集してきた「つくばベンチャー協会」と、つくば地域の活性化を目的として設立された「NPO 法人つむぎつくば」は、つくばの地に起業家精神を醸成し、つくば発ベンチャー企業の輩出を応援したいと祈念して、『つくばベンチャー大賞』を創設した。

「つくば」は30数年前から研究学園都市として発展してきたが、90年代半ば以降、バブル崩壊後の日本経済牽引の要（かなめ）として日本版シリコンバレーを期待されながらも、最近まで「ベンチャー不毛の地」と言われてきた。茨城県には、（財）茨城県科学技術振興財団とつくばサイエンス・アカデミーによる「つくば賞・つくば奨励賞」、「江崎玲於奈賞」という研究学園都市に相応しい自然科学の研究成果を顕彰する賞が存在する。これらに加えて、成果の事業化に焦点を当てた『つくばベンチャー大賞』を設けることで、研究成果の社会還元による新産業創出や生活の質の向上という新しい役割が期待される「つくば」に一石を投じたいと願った。本賞が契機となって、つくば発ベンチャー

が振興し、この地のクラスター形成の基盤になるとともに、国の発展とクオリティ・オブ・ライフの向上に寄与することができれば、主催者の本懐として、これに過ぎるものはない。

3．第1回の実行体制と募集

第1回つくばベンチャー大賞は、「つくばベンチャー協会」と「NPO 法人つむぎつくば」が主催し、茨城県、財団法人茨城県中小企業振興公社、つくば市、つくば市商工会、筑波大学産学連携会に後援を依頼した。実行委員会を結成し、委員長には、つくばベンチャー協会代表幹事で、(株)生体分子計測研究所代表取締役の岡田孝夫氏が就任した。また、賞の(「審査」ではなく)選考にあたる選考委員会の委員長は筆者が担当した。賞金と実行経費をすべて民間で賄うために、企業と個人に幅広く協賛を依頼し、1口3万円で寄附を募った。

6月29日に、(株)つくば研究支援センターで開催した「つくばベンチャーの夕べ」において、本賞の創設と第1回の募集要項を発表した。その場において、『つくばベンチャー大賞』は、つくば市とその周辺(晴れた日に筑波山が望める地域)で起業した会社、つくばの研究機関の研究成果を事業化した会社等を対象として、つくばらしい高い技術力、知性、感性を活かした事業を展開するベンチャー企業を顕彰するものであることが宣言された。

応募は9月30日まで受け付けた。簡単な応募様式により書類作成のハードルを低くし、選考委員が深く関係する企業の応募は遠慮していただいた。初めは低調であったが、最終的には、37社からの応募があった。この数は予想をはるかに超えるものであり、つくばにおけるベンチャー熱の高揚が感じられた。

4．選考委員会

本賞の選考に責任をもつ選考委員会の委員として、つくばに関係があり、つくばの発展を願う有識者を、幅広い分野から14名にお願いした(表1)。重要な役職にあり、超多忙の中を、無報酬で選考に当たっていただいた各委員に、衷心より感謝したい。

第1回選考委員会を8月26日に開催し、選考規準について討議した。9月30日に募集を終了した後、各委員に全応募企業の資料を送付し、10月一杯をかけて、それぞれ独立に1件の『大賞』候補と数件の『特別賞』候補を、理由を付けて推薦していただいた。同時に、「つむぎつくば」の会員には、ホームページから『大賞』への投票を呼びかけた。

表1：『第1回つくばベンチャー大賞』選考委員会委員（五十音順）

縣 久二	(株)ジャフコ	常務取締役
石塚万理	(株)つくば研究支援センター	インキュベーションマネジャー
猪瀬忠彦	監査法人トーマツ	代表社員(公認会計士)
大竹美喜	(財)国際科学振興財団	会長
久世和資	日本アイ・ビー・エム(株)	執行役員、東京基礎研究所所長
高木英明	筑波大学	大学院システム情報工学研究科教授
滝本 徹	内閣府	政策統括官(沖縄政策担当)付参事官
富江伸治	筑波大学	名誉教授、前副学長
西谷隆義	(学)筑波研究学園	理事長、筑波研究学園専門学校長
西野虎之介	常陽銀行	経営顧問
平井寿敏	産業技術総合研究所	産学官連携推進部門 企業・大学連携室長
平尾 敏	野村證券(株)	公益法人サポート室課長
藤木良規	物質・材料研究機構	名誉顧問
山中唯義	(株)スカイター・ファイナンシャル・マネジメント	代表取締役
渡部恒弘	UBS証券会社	副会長

5. 選考結果

11月8日に開いた最終選考委員会(12人が出席)において、各委員からの推薦を基に、「つむぎつくば」会員による投票結果も参考にして、『大賞』2社と『特別賞』4社を決定した(表2)。

表2：『第1回つくばベンチャー大賞』受賞企業

	つくばベンチャー大賞	(株)植物ゲノムセンター
	つくばベンチャー大賞	(株)つくばウエルネスリサーチ
特別賞	つくば・ベストIT賞	(株)ベストシステムズ
	つくば・ものづくり賞	(株)ベテル
	つくば・ものづくり賞	(株)つくばセミテクノロジー
	つくば・チャレンジ賞	(株)オキサイド

『大賞』が2社になったのは、第1回ということで、これまでに設立されていた有力なベンチャーが拮抗し、1社に絞り切れなかったからだ。選考の規準は、事業・技術の新規性・卓越性、つくばのシーズ・資源の活用度、地域・社会・産業の振興、または個人のクオリティ・オブ・ライフ向上への貢献、経営状態(成長性、将来性)及びビジネスプランとした。『大賞』の選考には、IPO(株式公開)の計画も考慮した。応募企業は、バイオ、ナノ、情報・通信の

研究開発からサービス指向まで多岐に渡り、異業種間でのレベルの高い競争になったので、選考は難しい決断であった。

『大賞』を受賞した(株)植物ゲノムセンターは、遺伝子組み換え技術を使わないゲノム育種法による新品種コシヒカリの開発で、また(株)つくばウエルネスリサーチは、高齢者が寝たきりにならない健康増進事業の展開で、ともに、つくば発の研究成果が全国の農業や医療行政にインパクトを与えようとしている点を評価した。『特別賞』には、(株)ベストシステムズが産総研発の並列科学計算支援技術の開発、(株)ベテルは1973年の創業以来、計測機器分野における新製品の継続的开发、(株)つくばセミテクノロジーは「つくばベンチャーラボパーク」に入居するノンケミカル半導体洗浄装置のメーカー、そして、(株)オキサイドは旧無機材研の研究者による光素子の基礎となる新材料開発という、いずれも「つくば」に根差した特色と実績のある企業を選ぶことができたと自負している。

この選考結果は、筑波研究学園都市記者クラブと東京・内幸町のフォリンブレセンターで発表され、多くの新聞が報じた。

今回は選に漏れた企業の中にも、技術シーズの新規性・卓越性が素晴らしいものが多く見られたので、次回までには、これらの会社のビジネスが立ち上がり、新手(あらて)も加わって、また競争が激しくなると予想される。

6. 授賞式

11月18日に、つくばカピオで開催中の茨城県等主催「テクノフェア2005 in つくば」の会場をお借りして授賞式を行い、60名を超える参加者を得た。

来賓として、坂本達男茨城県商工労働部産業政策課長、宇都木久夫つくば市経済部長、大竹美喜アメリカンファミリー生命保険会社最高顧問からご挨拶をいただいた。続いて、選考委員長から、受賞企業の発表と選考の講評が示された。実行委員長から、大賞受賞企業に対し、表彰状の他に、副賞50万円とつくば市在住の中山庄太郎氏作の盾「暁」が授与された。また、特別賞受賞企業には、表彰状、副賞5万円、かすみがうら市の都賀俊雄氏作の「つくば焼き」が授与された。最後に、大賞を受賞した(株)植物ゲノムセンターの美濃部侑三社長と(株)つくばウエルネスリサーチの久野譜也社長が挨拶された。

7. 謝辞

本賞は、平成16年5月末に、岡田孝夫氏が「つくばにはベンチャー企業を讃える賞がない。ベンチャー企業の活性化、新産業研究都市への脱皮には、成功例を出すことが最も重要であり、優れたベンチャー企業を讃え、表彰し、鼓舞することが不可欠である。」として、発案されたものである。その後の議論でこれを「民が民を讃える賞」として位置づけ、今回の実行には「つくばベンチャー協会」と「NPO法人つむぎつくば」の会員有志がボランティア(手弁当)

で奮闘した。特に、上田靖之、奥信彦、小野史子、木本直樹、近藤真太郎、齊藤和海、鈴木孝之、滝本徹、友部克彦、花山亘、山中明、綿引典之（所属・敬称略、五十音順）の各氏に感謝したい。このチームの使命感、結束、企画力、行動力（体力）が今回のプロジェクトを成功に導いたと確信している。

また、今回の賞金と経費のための資金は、本賞の趣旨にご賛同された30を超える企業・個人からの協賛金で賄うことができた。深甚の感謝を捧げる。